

ニュー・リベラリズムと進化論のアナロジー

西南学院大学 江里口拓

I, アプローチの視角

J.A.ホブソンの過少消費説, T.H.グリーンの積極的自由との2つでイメージされがちなニュー・リベラリズム(以下 NL)をめぐるのは、1970年代末以降に研究が急展開し、多様な広がりを見せている。本報告では、NLにおけるリベラリズムの論じられ方の特徴を探るにあたって、進化論のアナロジーから整理を試みたい。

研究史において、グリーンの積極的自由論を重視したものは、河合(1930)、I.バーリン(1969)であろう。個々人の諸活動への“国家干渉からの自由”を掲げた古い自由主義は、19世紀末における労働運動、普通選挙制などによって福祉国家が保障する“～への自由”として生まれ変わった。そしてその後の諸研究によって、グリーンが、カントやヘーゲルの影響を受けたオックスフォード理想主義哲学者として、ベリオル・カレッジを拠点に、ホブソン、ホブハウスらへ多大な影響を与えたという標準的な理解が生み出されてきた。

だが、M.フリーデン(1978)は、NLがグリーンとは独立であったと主張し(NLとグリーンとの“断絶説”)、進化論・生物学のアナロジーによる整理を提示した。本報告では進化論への着目というフリーデンの示唆的な研究視角を用いて、NLのみならず、グリーンおよびNLの同時代人までを含めた構図のもとで再検討してみたい。その事で、しばしば過度に強調されすぎる傾向にある、“断絶説”に具体的な意味を与え、同時代のリベラリズムの特徴を描きうると考えるからである。以下では順番に、グリーン、NLの中心人物、NLの周辺人物を検討してみよう。

II, 出発点としての T.H.グリーン: 倫理の予定調和

フリーデンによる“断絶説”を踏まえた上で、あえてもう一度、NLにとってのグリーンの意味を問い直せば、どのような構図が描けるであろうか。

積極的自由についてグリーンは言う。「高く評価されるべき自由とは、他者と共に、行為し享受するに値することを行う積極的な権力や能力を意味する」(Green, 1881)。グリーンは積極的自由論は、経済活動の自由の論点が希薄であるが、むしろ J.S.ミルの「人格陶冶論」を継承していた。

この倫理性の意味と涵養に向けられたグリーン議論こそが、NLの共通土俵であった。しかも、NLは倫理性の涵養手段としてリベラリズムを位置づけ、“リベラリズムなくして倫理

なし”という命題をグリーンから引き継いでいた。グリーンは、功利主義が、倫理的行為を権力で強制あるいは利益誘導することで、内発的な倫理性をむしろ墮落させ、倫理社会実現に有害であると強く批判していた。グリーンにとって、国家は「真の道徳性が自発的にかつ私心無く発露される領域」を守るべく、「障害の除去」に役割を限定しなければならない(Green 1879 -1880)。

この「障害の除去」という概念には、正しく放置すればリベラリズムは倫理性へと発展していくという楽観論・予定調和論を垣間見ることができよう。実は、NL へのグリーンの影響は、積極的自由の提唱それ自体にあったのではなく、いわば“積極的自由の実現策としてのリベラリズムへの信頼”にあったのだ。

ただし、グリーンは“どうしてリベラリズムは正しく放置すれば倫理性に至りうるのか？”という問いに、NL の論者たちが納得する説明を与えきれなかった。このグリーンの説明不足を補うべく、NL の論者たちは、スペンサー、ダーウィンらの進化論に依拠した。

Ⅲ、ニュー・リベラリズムと進化論

1、スペンサーとホブハウス

H.スペンサーは、社会科学に冷酷無慈悲な適者生存原理を持ち込んだソーシャル・ダーウィニズムの主唱者だと理解され、NL と対立的に描かれてきた。しかし、このステレオタイプな理解は、NL の本質理解を妨げてきた面がある。実はスペンサーは、グリーンの説明不足(“どうしてリベラリズムは正しく放置されれば倫理性に至りうるのか？”)に、一つの解決を与えていたともみなしうるからだ。

スペンサーの社会進化論では、万物の法則として「進化」すなわち「単純なものから複雑なものへの分化」ですべてが説明される。経済社会は、軍事的なものから産業的な社会へと進化していく。経済(分業)においても社会においても進化の結果、個々の部分は、全体の不可欠な要素として全体と調和していくのであり、社会には倫理的関係が実現される、と。ただし、スペンサー自身は、こうした予定調和的な社会進化を実現すべく、政策面では徹底した自由放任を主張したが、ホブハウスは、スペンサーをもとに、上述のグリーンの説明不足を乗り越えようとした。

ホブハウスは、スペンサーの議論を下敷きにして、もともと進化には予定調和的な倫理プロセスがあるとしており、自由主義はこれを開花させていけば良いと思考していた。スペンサーによる万物(宇宙さえも)が従う法則としての進化論を、ホブハウスは、19 世紀後半

の社会・政治における具体的経験と結合させた。ホブハウスによれば、古いリベラリズムを代表するグラッドストーンさえも、「道徳の力」であり「社会的良識が十分に発揮される未知を開いた」存在として把握され、NLと連続して理解されることになる。

来るべき社会の倫理的「調和」へ向けて、リベラリズムのプロジェクトは今後も継続されるべきである。古い政治哲学だとの批判は誤りであり、リベラリズムの進歩は、むしろ平等や福祉などの社会的目標を実現させる方向に向かっている。万人の人格発展のためには、「機会の平等」が必要であり、社会改良を推進する「積極的国家」という概念は、これと矛盾しないのである(Hobhouse 1901)。

通常、社会改良、福祉国家的諸立法が、むしろ社会進化の例証として描かれているのがホブハウスのリベラリズムの特徴である。例えば、A.H.ハルゼー(2004)は、イギリスで最初の社会学教授となったがホブハウスの社会進化論が楽観的であったことで、社会対立をめぐるイギリス社会学の発展を阻害した面があると指摘していた点も考慮に入れば、ホブハウスにおけるリベラリズムと社会進化論とは表裏一体をなしていたと言えるであろう。

2, ダーウィンと D.G.リッチー

ダーウィンにおける突然変異と自然選択の進化論的生物学が、その名を冠したソーシャル・ダーウィニズムとしてイメージされ、しかもスペンサーの名前と区別せずに流布してしまったことで、ダーウィン独自の社会進化論はさほど注目されてこなかった。しかし、ダーウィンは『人間の由来』(1871)において、スペンサーとは異なる社会進化論を展開していた。ダーウィンによれば、人類史において、自然淘汰の単位は個人ではなく集団である。その場合、競争に優れた集団が生き残り、その鍵は人間に独自の本能および制度である。

しかも、重要な事は、集団の進化すなわち淘汰プロセスにおいて、集団内の構成員に対して利他的な種族が生き残るという指摘である。D.G.リッチーは、『ダーウィニズムと政治学』(1901)において、ダーウィンのこうした議論を、自己のNLの基礎にした。社会集団が競争的淘汰の単位として想定されていることで、いかに生き残るかというルールを集団当事者が自ら変えて行くことが可能となり、その必要が出てくる。リッチーによれば、「我々の社会が外部からの攻撃や内部からの崩壊によって台無しにされないように、我々は守るべきであろう。進化の理論は正しく理解された場合には、自由放任という先験的な教義を是認することはない」(Ritchie 1891)のであり、むしろ集団を強化するためには、社会保障的諸立法などを整備するが合理的にもなるわけだ。

リッチーにとってのリベラリズムとは、社会集団どうしの競争・淘汰による社会制度の進

化・発展という客観法則への是認であったと言うことができよう。ただし、リッチーは、スペンサーを批判していた。それも、ホブハウスが継承した予定調和的な倫理を重視したスペンサーではなく、政策論で自由放任を強調したソーシャル・ダーウィニストとしてのスペンサーであった。

IV、ニュー・リベラリズムの周辺と進化論

1, B.ボザンケ

以上、「NL＝グリーン＋社会進化論」という構図で見てきたが、グリーンの後継者には社会進化論から独立であった人物もいる。グリーンの後継者を自負していたボザンケである。ボザンケは、COS(慈善組織協会)の論客であり、社会改良をめぐる、ホブハウスに「ヘーゲル主義者」、「国家主義者」と厳しく攻撃されたことで有名である。

ボザンケは、友愛組合、労働組合などの団体的自助が、労働者階級の人格発展に寄与すると評価した点で、グリーンに沿っているが、他方で、無秩序な救貧制度・慈善が、貧民の人格的成長を阻害していると批判した。ウェブ夫妻による行政制度の刷新案に対してボザンケは、グリーン功利主義批判を継承し、「権力による道徳性の強制は自己矛盾である」と批判した。ボザンケはCOSなどの民間団体を重視するにあたって、国家は「実践と究極目標においては積極的」だが「即時的には消極的である」と述べた。ボザンケの議論は、いわば「消極的積極的自由論」(積極的自由の実現のために国家は消極的な役割を果たすべき)と位置づけることができよう。

ボザンケは、スペンサーの社会進化論を一通り概観しつつも、「理性の軽視」だと退け、大脳における精神活動のアナロジーをもとに、倫理性へといたるエリート主義的な意志の重要性を強調していた。みられるように、ボザンケにおいてはグリーンの影響は根強いものの、NLにみられる予定調和的な社会進化論は共有されていない。

2, ウェブ夫妻

ウェブ夫妻は、NLとの緊密さがたびたび指摘されてきたし、ビアトリス・ウェブはスペンサーの弟子でもあったが、師匠スペンサーを批判するにあたって、「ダーウィンのブルドッグ」T.ハクスリーの議論を参考にしていた。

ハクスリーは、リッチーとは異なり、ダーウィンの生物進化論をダイレクトに社会に応用した。適者生存と淘汰によって生み出される自然選択の世界は、人間の心地よさに適合するは限らない。人類の英知とは、自然選択の結果をコントロールする「園芸過程」にある。

人為的な社会設計は慎重であるべきだが、エリート的な介入を排除するものではなかった。

ウェブ夫妻は、スペンサーにおけるラマルクの要素(獲得形質の遺伝)に着目し、自由放任(淘汰)ではなく社会改良(人間進歩)の可能性に注目した。ウェブは、スペンサーによる自由放任への固執を批判する際に、ハクスリーを引用し、進化のコントロールの必要性を主張したが、そのエリート主義的傾向を NL から批判された。NL 特に、ホブハウスにとって、ウェブの議論はリベラリズムに対立する功利主義の一種と映ったのであろう。

ただし、ウェブ夫妻は、倫理や経済面での「潜在能力の全面開花」を重視していた。制度設計において個々人の行動を制度的に管理しようとする色彩が強いウェブ夫妻の議論は、政策論ではリベラリズムと距離があるものの、経済論的な積極的自由論という NL とは別系統の系譜にあると言えるかもしれない。

3, A. マーシャル

最後に、進化概念を非常に重視する A. マーシャルを取り上げておこう。マーシャルは企業組織の間での競争と淘汰によって、市場経済がダイナミックに発展していく着想をもっており、集団内部に利他的なルールを持つ集団が生き残るとして、ダーウィンの主張も展開していた。マーシャルは、生き残った企業組織が、全体としての経済にとって有益かどうかは、未知であると述べても、基本的な論調は、こうした進化に対して楽観的であった。

マーシャルは自由についても論じている。ただし、ここで言う自由は、政治的リベラリズムというより、経済活動における「創意の自由」としての経済発展の根拠であり、NL における倫理性と直結してはいない。マーシャルにも「労働者階級のジェントルマン化」、「経済騎士道」などのように、人格陶冶・経済倫理を問う視座はあるが、経済合理性(その限りでの倫理)として説明されている。倫理性へいたるリベラリズムの予定調和性を NL の核心とみれば、マーシャルは、NL の外に位置づけられるであろう。他方で、経済論に限定すれば、マーシャルの議論は NL の要素を強く持っていると言えよう。

V, 暫定的な結論

以上、進化のアナロジーをもとに、NL とその周辺について概観してきた。残された課題は多いが、NL にとっての進化は単なるアナロジーを超えて、しばしばリベラリズムとほぼ同義に使用された面があると思われる。つまり、NL とは、グリーンの積極的自由概念を下敷き

に、その実現手段としてのリベラリズムの予定調和性を信奉し、実現しようとする思想的態度であった、と見てみる事ができる。「NL=グリーンの積極的自由+予定調和的社会進化論」という構図が成り立つと思えるのである。

さらに、「予定調和的社会進化論」の内容にも、スペンサー、ダーウィンなどの種別があり、ホブハウスとリッチーという NL の代表者の比較も可能となるが、詳細な検討は今後の課題である。他方で、また進化論への着目は、NL とその周辺人物との境界線を提示してもいる。例えば、ホブハウスとウェブ夫妻の違いは、スペンサー(進歩への楽観主義)とハクスリー(介入主義)との違いに投影されている。また、同じくグリーンから影響を受けたボザンケとホブハウスとの違いは、スペンサーの予定調和的社会進化論への態度で、説明可能である。

なお、本報告に残された最大の課題点は、NL の代表者である J.A.ホブソンについて触れることができなかったことである。ホブソンの内在的理解に、進化論的図式が馴染むのかどうかも問われるべきであろうし、その際、過少消費説という、いわばシステムの不調和に着目したホブソンにおいて、ホブハウスに代表される予定調和的秩序への信頼としてのリベラリズムがどのように位置づけられていたのか、という問題などが残されていると思われる。

* 文献リストは当日配布します。